

二〇二一年度入学試験

試験問題

国語

注 意

- 一、開始のチャイムが鳴るまで開いてはいけません。
 - 二、受験番号を解答用紙の三カ所に書き、答えはすべて解答用紙に書きなさい。
 - 三、問題は **1** から **5** までで、九ページにわたって印刷してあります。
- なお、問題用紙のほかに別紙があり、表に別紙 1、裏に別紙 2 が印刷されています。
- 四、終了のチャイムが鳴ったら、すぐに筆記用具を置きなさい。

1

次の①～⑧の傍線部分について、漢字は読みをひらがなで書き、ひらがなは漢字に直しなさい。

- ① 専ら聞き役にまわる。
- ② 滑らかな肌触り。
- ③ 茶わんの縁が欠ける。
- ④ 事態を收拾する。
- ⑤ いだいな功績を残す。
- ⑥ 販売のきよてんを築く。
- ⑦ 虫眼鏡で字をかくだいする。
- ⑧ 食糧をちよぞうする。

2 別紙1の文章を読んで、あとの各問いに答えなさい。

問1 傍線部分(1)「ふと眼をやると、裏山の山桜がほころんでいる」とあるが、この部分は、いくつの文節に分けられるか。次のア～エから最も適当なものを一つ選び、その記号を書きなさい。

ア 四つ

イ 五つ

ウ 六つ

エ 七つ

問2 次の漢字は傍線部分(2)「横」を行書で書いたもので、行書の特徴の一つである点画の省略がみられる。このように点画を省略している行書の漢字をあとのア～エから一つ選び、その記号を書きなさい。

横

ア 門

イ 月

ウ 木

エ 光

問3 傍線部分(3)「競走馬という観点から見れば、それはいささか不完全な状態だと言わざるを得ないだろう」とあるが、勝ちが求められる競走馬として、フィッシュアイズのどのようところが不完全なのか。四十五字以内で説明しなさい。(句読点も一字に数える。)

問4 傍線部分(4)「お前からのアドバイス」とあるが、どのようなアドバイスか。解答欄に合うように二十字以内で説明しなさい。(句読点も一字に数える。)

問5 傍線部分(5)「途端に池田が赤くなった。」とあるが、このときの池田の心情の説明として最も適当なものを、次のア～エから一つ選び、その記号を書きなさい。

- ア 自分よりも芦原の方が乗り手として優れていると光司にほめかされ、腹立たしい気持ち。
- イ 競走馬に対する自身の思いを光司に親切心だと受け止められ、そのことが照れくさい気持ち。
- ウ 忙しく充実した光司の生活をうらやんで口から出た皮肉が、光司に伝わらず悔しい気持ち。
- エ 自分の発言をアドバイスとして受け入れず、軽くあしらう光司の態度に驚きがつかりする気持ち。

問6 傍線部分(6)「狭くて深い業のようなもの」とあるが、どういうことか。最も適当なものを、次のア～エから一つ選び、その記号を書きなさい。

- ア 二人とも競馬に携わっているにもかかわらず、別々の道を行くしかないということ。
- イ 同じ世界の中でぶつかることもあるが、一人の観客として幼なじみを応援してしまうこと。
- ウ 二人が歩んできた世界の違いを感じ、幼馴染みを応援することができないということ。
- エ 関わり方は異なるが、結局二人とも競馬界で生きていくことを選んしまうこと。

3

別紙2の文章を読んで、あとの各問いに答えなさい。

問1 傍線部分(1)「そのような視点」とあるが、どのような視点か。本文中の言葉を使って、「……という視点」につながるように四十字以上五十字以内で書きなさい。(句読点も一字に数える。)

問2 傍線部分(2)「通過儀礼」とあるが、それはどのようなものか。本文中から二十字で抜き出して書きなさい。(句読点も一字に数える。)

問3 傍線部分(3)「おそらく」と品詞が同じものはどれか。次のア～エから適当なものを一つ選び、その記号を書きなさい。

ア まぶしくて目が開けられない。

イ もしも勝てたらうれしい。

ウ 満足な結果が出せた。

エ いかなる困難にも負けない。

問いは次ページに続く

問4 傍線部分(4)「二人の人間の生命に対する感じ方」とあるが、次の表にあてはまる言葉を、A・Bは字数に応じて本文中から抜き出し、C・Dは、あてはまる言葉の組み合わせとして最も適当なものを、あとのア～エから一つ選び、表を完成させなさい。

	一九六〇年代以降	一九六〇年代以前
生命のとらえ方	生命は(A 二字)である、 ととらえる。	上記に加え、生命とは(B 二十六字) ものである、ととらえる。
キツネとのかかわり	(C)	(D)

- ア C だまされない D だまされる
 イ C だまされる D だまされない
 ウ C だまされる D だまされる
 エ C だまされない D だまされない

問5 この文章の特徴として最も適当なものを次のア～エから一つ選び、その記号を書きなさい。

- ア 多くの行事を紹介することで、伝統文化の大切さを訴えている。
 イ 東京と地方とを比較し、地方の暮らしの豊かさを強調している。
 ウ 行事の意味から人々のもつ生命観を考察し、説得力をもたせている。
 エ なじみのない言葉を取り上げ、読者の興味を引き出している。

4 次の文章を読んで、あとの各問いに答えなさい。

今は昔、**忠明**といふ**※**検非違使ありけり。若男にてありける時、**※**清水の橋殿にて、**※**京童と諍ひをしける。京童、手ごとに刀を抜きて、忠明を**※**たて籠めて、**※**殺さんとしければ、忠明も、刀を抜きて、御堂さまに出たるに、御堂の東の**※**つまに、(1)あまた立ちて(2)向かひければ、(3)そちは**※**え逃げで、**※**薮の本を脇に挟みて、前の谷

に躍り落つ。葎に※風しぶかれて、谷の底に鳥の居るやうに、※やをら落ち居ければ、それより逃げて往にけり。京童、谷を見下ろして、(4)あさましがりて、立ち並みてなん見下しける。

(本文は『新日本古典文学大系 古本説話集』による。)

* 一部表記を改めたところがある。

注(※) 検非違使＝京の治安を守る、警察と裁判所をかねた官職 清水の橋殿＝京都の清水寺の本堂の前にある、「清水の舞台」のこと

京童＝京都の無法な行いをする若者たち たて籠めて＝取り囲んで 殺さんとしければ＝殺そうとしたので つま＝端

え逃げで＝逃げるできないで 葎＝日よけや風雨よけのための戸 風しぶかれて＝風が吹きつけて やをら＝そつと

問1 傍線部分(1)「あまた」の意味として最も適当なものを次のア～エから一つ選び、その記号を書きなさい。

- ア たまたま イ 大勢 ウ 本当に エ 何回も

問2 傍線部分(2)「向かひければ」を現代かなづかいに改め、すべてひらがなで書きなさい。

問3 傍線部分(3)「そち」の指示内容を、本文から七字で抜き出して書きなさい。

問4 傍線部分(4)「あさましがりて」(驚きあきれて)とありますが、この主語はだれか。次のア～エから一つ選び、その記号を書きなさい。

- ア 忠明 イ 検非違使 ウ 京童 エ 作者

5

次の【話し合いの様子】は、中学生のあおばさんがクラスの友人と三重県の児童生徒のケータイ（携帯電話やスマートフォン）所持率について話し合ったときの様子の一部である。【資料1】はケータイ所持率に関するもので、【資料2】はケータイの使用状況に関するものである。これらを読んで、あとの各問いに答えなさい。

【話し合いの様子】

あおばさん 最近、津新町駅でケータイを使用している小学生の姿をよく見るよね。【資料1】を見ると、平成二十六年から二十九

年度にかけて、小学生のケータイ所持率は①パーセントくらい増えているね。

さゆりさん 小学生はケータイをどのように使っているのだろう。

【資料2】を見ると、一番多いのは平成二十六年度は②だけれど、二十九年度になると③に変わっているね。

あおばさん 確かに、私にも心当たりがあるし、周りの友だちが話している使い方とも一致するなあ。ついつい使ってしまうよね。

さゆりさん 中学生の使用状況も見てみようよ。中学生は平成二十六年度も二十九年度も④の使用が一番多くなっているよ。

部活動や、友だちと遊ぶ約束をすることが多くなり、やり取りする機会も増えるからかな。

こころさん 平成二十九年度の小学生でもその使用は⑤番目に多いものになっているね。平成二十六年と比べてメールの使

用が十パーセント減っているのに対して、④の使用は十パーセント以上増えているよ。時代とともに使い方が大きく変わっていることがよく分かるね。

あおばさん メールの使用状況は⑥ね。ところで、インスタグラムは平成二十六年のデータに載っていないけれど、それはな

ぜなんだろう。

さゆりさん それは平成二十六年の段階ではインスタグラムがなかったからだよ。これからは新しい使い方が生まれてくるだろう

けれど、振り回されないように工夫する必要があるそうだね。

【資料1】

	小学校			中学校			高等学校		
	H26	H29	増減	H26	H29	増減	H26	H29	増減
持っている	39.9%	50.3%	10.4	60.9%	73.2%	12.3	99.1%	99.2%	0.1
持っていない	60.1%	49.7%	-10.4	39.1%	26.8%	-12.3	0.9%	0.8%	-0.1

【資料2】

	小学校			中学校			高等学校		
	H26	H29	増減	H26	H29	増減	H26	H29	増減
メール	53.8%	43.1%	-10.7	39.2%	15.5%	-23.7	25.3%	11.2%	-14.1
ホームページ	10.8%	14.4%	3.6	20.2%	19.1%	-1.1	26.3%	22.2%	-4.1
電子掲示板	2.6%	3.6%	1.0	3.5%	4.6%	1.1	5.0%	3.6%	-1.4
オンラインゲーム	25.0%	37.8%	12.8	36.1%	44.9%	8.8	37.6%	40.9%	3.3
ブログ	1.8%	3.1%	1.3	4.6%	3.1%	-1.5	5.3%	2.7%	-2.6
動画サイト(YouTubeなど)	33.0%	63.1%	30.1	60.2%	77.9%	17.7	56.6%	68.3%	11.7
LINE	27.6%	42.0%	14.4	76.1%	88.0%	11.9	86.8%	87.0%	0.2
Twitter	4.1%	6.9%	7.0	28.2%	35.8%	11.3	56.5%	67.3%	13.4
Facebook		4.2%			3.7%			2.6%	
Instagram	—	5.9%	—	—	21.1%	—	—	47.1%	—
音楽等のダウンロード	13.8%	19.2%	5.4	33.0%	39.2%	6.2	34.9%	42.4%	7.5
ショッピングやオークション	3.5%	6.2%	2.7	7.9%	11.3%	3.4	18.4%	21.1%	2.7
その他	28.0%	22.2%	-5.8	5.7%	5.1%	-0.6	2.7%	2.4%	-0.3

出典：三重県教育委員会事務局生徒指導課

平成29年度「スマートフォン等の使用に関する実態調査」

問1 【話し合いの様子】の中の①に入る数字として最も適当なものを、次のア～エから一つ選び、その記号を書きなさい。

- ア 5 イ 10 ウ 20 エ 30

問2 【話し合いの様子】の中の②・③・④に入る言葉として適当なものを【資料2】から抜き出して書きなさい。

問3 【話し合いの様子】の中の⑤に入る数字として最も適当なものを、次のア～エから一つ選び、その記号を書きなさい。

- ア 1 イ 2 ウ 3 エ 4

問4 【話し合いの様子】の中の⑥に入る言葉として最も適当なものを、次のア～エから一つ選び、その記号を書きなさい。

- ア 中学生・高校生共に、減少している
イ 中学生・高校生共に、増加している
ウ 中学生は減少しているが、高校生は増加している
エ 中学生は増加しているが、高校生は減少している

問5 【話し合いの様子】の中の二重傍線部分「工夫する必要がありそう」について、今後どのような取り組みが必要だと考えられるか。あなたの考えを、次の「注意」にしたがって書きなさい。

〔注意〕 ① 題名は書かずに本文から書き出しなさい。

② 具体的な取り組みを一つ取り上げ、あなたの意見を明確にして書きなさい。

③ 原稿用紙の正しい使い方にしたがって、全体を百六十文字以上二百文字以内にまとめなさい。

これで問題は終わりです。

別紙1（本文は、設問の都合で省略した箇所があります。）

厩舎の前を歩きながら、光司は自分の足元に白い花びらが舞っていることに気がついた。

(1)ふと眼をやると、裏山の山桜がほころんでいる。今年の桜の開花は、例年よりも早いようだ。

夜明け前から始まった調教が一段落し、瑞穂や他の厩務員たちは、午後の飼いつけ時間まで束の間の休憩を取っている。母屋の事務所で調教報告書を書き終えた光司は、ひと足早く馬房の様子を見に、表へ出てきていた。

フィッシュアイズの馬房の前までくると、光司は足をとめて金網の奥を覗き込んだ。

曳き運動を終えたフィッシュアイズは、間食用に用意されている布袋の中の青草をモリモリ食べている。

光司に気づくと、フィッシュアイズは一瞬咀嚼をやめた。ふいと(2)横を向き、ぶるつと鼻を鳴らす。まるで「けっ」と吐き捨てるような態度だった。

「相変わらず、可愛げのねえ馬だな」

苦笑する光司を、フィッシュアイズは蒼白い眼球に浮かんだ小さな黒目でじろりと睨み返す。

「お前さん、一度、誰のおかげで飯が食べてるのか、ちゃんと考えたほうがいいんじゃないかねえの？」

さすがに暴れまくることはなくなったが、フィッシュアイズが心を許しているのは、今でも担当厩務員の誠と、共にレースに出る瑞穂だけだ。光司や他の厩務員に対しては、「許容してやっている」というのが、この馬の変わらぬスタンスだった。

だが、本当にこのままでいいのだろうか、最近光司は考えるようになっていた。

先週、誰もが楽勝だと思っていた銀河特別で、フィッシュアイズは負けた。

レースの前日、馬っ気を出したティエレンにのしかかられて激怒したことが響いたのか、朝から興奮状態が続き、本馬場に出てきたときには既に「祭りが終わった」状態になっていた。

どんな競馬にも絶対はないのだから、負けたこと自体はやむを得ない。

しかし光司は、フィッシュアイズのこうした過敏さを、ときに危うく感じることもある。

馬が人間と同じような心を持っているとは思わない。だが、生き物である以上、馬には馬の感情がある。己の快楽に貪欲な牡馬はあ

る意味単純だが、周囲をよく観察する牝馬は特に難しい。

フィッシュアイズは、共に戦ってきた瑞穂を己の一部のように思っている節がある。その瑞穂が、大嫌いなティエレンに騎乗している姿を見ると、心底面白くなさそうな様子さえ見せる。

瑞穂を独占したが、瑞穂にしか騎乗させない。

(3)競走馬という観点から見れば、それはいささか不完全な状態だと言わざるを得ないだろう。

だからといって、心の奥底にトラウマを抱えているフィッシュアイズを、今後どう矯正していけばいいのかが、光司には今ひとつ、はつきりとしなかった。

心の奥に刻み込まれた傷を、馬はそう簡単に忘れない。

ならば、それを思い出させないように気を配るしか、方法はないのだろうか。だがそれでは、いつまでたっても根本的な解決にはならない。

或いは、それを上書きするような経験させるとか――。

そこまで思いを巡らせ、光司は息を吐いた。

現役ジョッキー時代から、馬と直接言葉を交わすことができたら

どれだけ楽かと、何度真剣に考えたかわからない。

「でもお前さん、もう少しでAクラスに上がれるところだったんだぜ」

再び青草をぐりぐり咀嚼し始めたフィッシュアイズに、光司は囁きかける。

(略)

「おい、緑川！」

ふいに、背後で濁声が響く。

振り向けば、厩舎の前の砂地を踏んで、池田が近づいてくるところだった。光司はフィッシュアイズの馬房から離れると、今は誰もいない洗い場の前で池田と落ち合った。

「お前んとこにきた、あの新しい芦毛馬のふざけた走りは一体なんなんだ」

池田は腕を組んで片眉を思い切り引き上げる。元々強面の人相が、益々悪人面になった。

「ああ、あれな」

「あれな、じゃねえよ！」

光司のぼんやりした返答に、池田は唾を飛ばした。

同じく鈴田競馬場のジョッキーだった父を持つ光司と池田は、幼い頃からの顔馴染みだ。二人とも、もとは「厩舎街の子供」だ。

二人が徹底的に袂を分かつようになったのは、中学を卒業した十五歳のときだった。池田が那須の地方競馬教養センターにいったのに対し、光司は父親の猛反対を押し切って、千葉の中央競馬会付属の競馬学校にいった。

当時の光司は、鈴田で調教師となった父の厩舎ではなく、中央競馬を選んだのだ。

亡き父の後を継いで鈴田の調教師になる以前、光司はJRA栗東所属のジョッキーだった。

不祥事を起こし、若くして引退を余儀なくされるまで、光司はフリーランスジョッキーとして、中央開催、地方開催と、文字通り全国を駆け巡っていた。デビュー三年目にフェブラリーステークスでGIを勝った光司には、どこへいっても騎乗依頼が殺到した。

(略)

一方的に騎手免許を剥奪されたときは、自分が競馬界に戻って

ることは二度とないだろうと思っていた。

ましてや、ずっと忌み嫌っていた、潰れかけた地方競馬場の、しかも「藻屑の漂流先」と揶揄されていた、父の厩舎を引き継ぐことになるうとは――。

「おい、緑川、聞いてんのかよ」

池田に大声を出され、光司は我に返る。

「あの馬、完全に、レースを舐めてんじゃないかねえか。ありやあ、お嬢ちゃんジョッキーなんかの手には負えないぞ。一度俺を乗せてみる。死ぬ気でぶつ叩いて、一発で、眼覚まさせてやる」

「……まあな」

「まあな、じゃねえよ！」

光司の生返事に、池田は眼を剥いた。

「大体俺は、「お馬さんの気持ち第一に」なんて、ぬるいことばかりぬかしてる※芦原には虫唾が走る。俺たちが乗ってるのは競走馬だぞ。競走馬は勝たせてなんぼだ」

「そうだな」

今度は光司も少し真面目に頷いた。

池田の言うことはあながち間違っていない。口は悪いが、この男はこの男なりに、馬のことを真剣に考えている。

(略)

池田が不審そうに眉を寄せたとき、光司の尻ポケットの携帯が震えた。取り出してみれば、広報課の大泉からのメールが着信していた。

「悪い、主催者から呼び出しだ」

「人気馬を抱える先生は、お忙しいこつてすな」

皮肉に口元を歪める池田に、光司は苦笑する。

「そう言うな。(4)お前からのアドバイスは、俺からも芦原に伝えておくよ」

(5)途端に池田が赤くなった。

「ふ、ふざけんな。いつ、俺がアドバイスなんかした。俺はあの馬の手綱をこの俺に寄せさせて言ってるんだ！」

(略)

中央で挫折を味わい、鈴田に戻ってきた自分と、鈴田でトップになりながらも、この先中央を目指そうとしている旧友。ひとつしかない道を、正反対に歩いていこうとする幼馴染みを思うと、光司は競馬界に携わる者の、(6)狭くて深い業のようなものを感じてしまう。でも、俺は駄目だったけれど、あいつなら――。

地方から中央に移籍したジョッキーのすべてが成功できるわけではないが、護るべきもののある池田の前途は明るいものであってほしいと、光司は思った。

(古内一絵著「蒼のファンファーレ」より)

注(※) 芦原…前出の「瑞穂」と同一人物

日本の人々がキツネにだまされていた時代とは何か。その時代に人々はどのような精神世界をもち、どのように自然とコミュニケーションをとりながら暮らしていたのか。そのような問いをたてるとき、ここにはかなり深い考察課題があることに気づく。現代の私たちの精神世界で「キツネにだまされた」という言葉を用いれば、それはあやしげな話にすぎない。しかし現代の私たちとは大きく異なる精神世界で生きていた人々にとっては、キツネはどのようなものとして私たちの横に存在していたのか。今日の私たちの精神では到達できないものがそこにあったことを、私たちは確認しておいたほうがいい。

(1) そのような視点にたつて、この章の最後に次のことにふれておこう。それは生命の個性性について、である。

人間がキツネにだまされなくなっていく頃、村の社会から消滅していくひとつの儀礼があった。もっともその儀礼のいくつかはいまでも残っているから、消滅したというより形骸化したといったほうが正確なものもある。それは民俗学が「(2) 通過儀礼」と呼んできたものである。

私が暮らす群馬県の上野村から東京方面に峠を越えると、埼玉県の秩父盆地に出る。上野村は長野県の佐久地方と秩父盆地を結ぶ街道ぞいの村で、現在では街道は国道二九九号線になっている。このような歴史もあつて、上野村には佐久地方の文化と秩父地方の文化が入っている。

かつて一九七〇年代に、姫田忠義が『秩父の通過儀礼』というドキュメンタリーフィルムを撮っている。実際にはこのフィルムはおこなわれなくなった儀礼を村人に復活させて撮影した部分も多い。一九六〇年代に村の儀礼は急速に解体していき、何とかそれ以前の姿を記録しようと、細部にいたるまで記憶を残している人がいるうちに姫田が撮ったフィルムである。

通過儀礼とは子どもが大人になる過程でおこなわれる行事のことである。『秩父の通過儀礼』では、子どもが生まれる前、つまり子どもが生まれることを希望する人たちがおこなう村の儀礼から記録されている。子を授けてくれるように神様をお願いする儀礼で、それは山のお堂に行つてお参りし、ときにそのお堂で一晩過ごす儀式である。

妊娠してからもいくつかの儀式がある。子どもが生まれて三日後には雪隠参りがある。かわやの神様に生まれた子を連れて報告に行く行事である。「雪隠」、「かわや」といえば便所のことであるが、いまでも一定年齢以上の人なら、かわやには神様がいてと教えられた人も多いだろう。

雪隠参りのときは、子どもの額に墨で「犬」という字を書いて出かける。これは犬の強い生命力にあずかつて、丈夫に育つようにというこららしい。面白いのはお参りに行くかわやは、自分の家の便所ではなく、隣の二軒の家の便所だということである。なぜそういう決まりになっているのかは、私にはよくわからない。ともかくも、その日が生まれてきた子どもがはじめて家の外に出る日である。

それからいろいろな行事がつづき、やがて五、六歳になると、子どもたちだけでおこなう祭りや行事に加わるようになる。ここでは年長者が幼少の者たちに教えながら、祭りや行事が遂行されていく、そうやって子どもは次第に若者になり、大人になっていくのである。

雪隠参りなどは上野村でもおこなわれていたと村人は言う。(3) そらくかなり多くの儀礼や行事が秩父と上野村は共通していたのだろうと思う。上野村では一九六〇年代にほとんどの通過儀礼が消滅した。

このフィルムをみて感じることは、(4) 一人の人間の生命に対する感じ方の今日との違いである。現在の私たちは、生命というものを個性性によつてとらえる。たとえば、私という生命がある。あなたという生命がある。このふたつの生命は無関係な位置にあるのかもしれないし、何らかの結びつきをもった関係にあるのかもしれない、というように、出発点にあるのは個体としての生命である。

花ひとつひとつにも、木の一本一本にも、虫一匹一匹にも、もちろん動物や人間一人一人にも、それぞれ固有の生命があり、全体的世界を個体の生命の集合としてとらえる。

しかしそれは、特に村においては、近代の産物だったのでないかと私には思えてくる。もちろんいつの時代においても、生命は一面では個性性をもっている。だから個人の誕生であり、個人の死である。だが伝統的な精神世界のなかで生きた人々にとっては、それがすべてではなかった。もうひとつ、生命とは全体の結びつきのなかで、そのひとつの役割を演じている、という生命観があつた。個体としての生命と全体としての生命というふたつの生命観が重なり合つて展開してきたのが、日本の伝統社会だったのでないかと私は思っている。

この感覚は木と森の関係をみるとよくわかる。木はその一本一本が個性性をもった生命である。だから木の誕生もあるし、木の死もある。しかしその木は、もう一方において、森という全体の生命のなかの木なのである。しかも森の木は、周囲の木を切られて一本にされてしまうと、多くの場合は個体的生命を維持することもむずかしくなるし、たとえ維持できたとしても木のかたちが変わってしまったほどに、大きな苦勞を強いられる。

森という全体的な生命世界と一体になってこそ、一本一本の木という個体的生命も存在できるのである。

この関係は他の虫や動物たちにおいても同じである。森があり、草原があり、川があるからこそ個体の生命も生きていけるように、生命的世界の一体性と個性性は矛盾なく同一化される。

伝統社会においては人間もまた、一面ではこの世界のなかにいた。人間は個人として生まれ個人として死ぬにもかかわらず、村という自然と人間の世界全体と結ばれた生命として誕生し、そのような生命として死を迎える。人間は結び合った生命世界のなかにいる、それと切り離すことのできない個体であつた。

伝統的な共同体の生命とはそういうものである。ところがその人間は「自我」、「私」をもっているがゆえに、共同体的生命の世界からはずれた精神や行動をもとる。

だからこそ共同体の世界は、地域文化が、つまり地域の人々が共有する文化が必要であつた。それが通過儀礼や年中行事であり、それらをとおして人々は、自然とも、自然の神々とも、死者とも、村の人々とも結ばれることによつて自分の個体の生命もあることを、再生産してきた。

このような生命世界のなかで人がキツネにだまされてきたのだとしたら、キツネにだまされる人間の能力とは、単なる個体的能力ではなく、共有された生命世界の能力であつた。

(内山節著「日本人はなぜキツネにだまされなくなったのか」より)

二〇二一年度入学試験 解答用紙
 注意 1 (I)(II)(III) それぞれに受験番号を記入する。
 2 ※印の欄には記入しない。
 国語 (I)

1

① 専ら
 ② 滑らか
 ③ 縁
 ④ 收拾
 ⑤ いかだ
 ⑥ きよてん
 ⑦ かくだい
 ⑧ ちよぞう

受験番号		

1・2 得点	
	※

2

問 1
 問 2

問 3
 問 4
 問 5
 問 6

⑤		
⑥		
⑦		
⑧		

40 20

受験番号		

3・4・5 得点	
	※

二〇二一年度入学試験 解答用紙

国語 (II)

3

問 1
 問 2
 問 3

問 4
 問 5
 問 6

50
 という視点

40 20

4

問 1
 問 2
 問 3

問 4
 問 5

問 6
 問 7
 問 8

26

5

問 1
 問 2
 問 3
 問 4

5

問 1
 問 2
 問 3
 問 4

問 3
 問 4

問 4

